

二〇二四年度

中世文学会秋季大会

公開講演・研究発表要旨

## 『発心集』の文学的達成と現代的意義

大阪府立大学名誉教授 田中 宗博

鴨長明（蓮胤）編『発心集』は、今日一般の読書人に広く読まれるに足る（古典文学）の名に値するの。その文学性の評価に関して、今一度現代の視点から考えてみたい。書中随所に窺われる脱俗・隠遁・執心忌避の観念は、時代の思潮をよく体現するとはいえ、それ自体が現代喫緊の課題と切り結ぶとは言えない。ただ、書名の示唆する（心）への注視は、人間認識の問題として時代を超えた普遍的文学課題に込めるものが、確かにあるように思える。

概して『発心集』は、「賢キ」人々を讃仰すべき先師・先賢について、（心）のうちを詳述しようとはせず、外部から際やかな言動を描くことで、発心の内実を示唆する方法を採る。他方、風前の草・浪上の月に喩えられる、乱れやすき（心）を抱えた人物については、時に心内語を用いて丁寧を描く傾向がある。それは巻第五第三話や巻第八第八話・第九話のような、悪心悪報話などに顕著であるが、そればかりではない。巻第四第十話のごときは、窮女への慈悲心から潔斎を破り、神罰を怖れつつも参籠を続ける小心翼々たる一無名僧の（心）の動きが細やかにたどられる。時代や体制の要求する規範に縛られつつ、それでも個人は自己の良心に基づいて、いかなる行為に踏み切ることが可能かを問う説話として、一話の問いは現代人にも無縁なものではない。

『発心集』は、往生伝の伝統を承けつつも漢文体を採らず、表現性の高い自国の言語と和文を採用した。編者長明は人生の多くを歌人として生き、和文に自覚的で（無名抄）物語世界にも親しんでいたと推定される。伝記的事実の示すところ、治天の君と後鳥羽の圏域を離脱し、出家後特定の寺院・宗派に属した形跡もない。いわば王法からも仏法からも距離をとり、一入道・隠者として生きたのが晩年の長明であった。そんな編者であったこそ、『発心集』は当代通有の時代思潮や様々な制約から、比較的自由に説話の再話が可能となった。賢愚両様の人間の（心）を注視する文学として、『発心集』は古典文学の名に値すると考える。

## 慈円という迷宮―思惟と開悟の△間宗教テキスト▽世界―

龍谷大学世界仏教文化研究センター・名古屋大学高等研究院客員教授 阿部 泰郎

慈円は、中世文学研究が、歴史や宗教など諸分野の研究を悉く総合して、初めて全貌が捉えられる、巨大な存在かつ表現者であった。遺されたそのテキストは、知の巨人による迷宮と喻えてもよい。それは終始、"書くこと"についての自己言及に満ちており、絶えざる思惟と自問自答による運動を止めない。それらの背後には、彼が創り上げた幾つもの宗教空間が、詠歌や声明の響きと共鳴するように展がっており、その文化的記憶は、『平家物語』や『北野天神縁起』絵巻をレガシーとしていまなお響き続けているようである。

慈円による宗教テキストの世界を探查し、解釈することが、『六道釈』を見いだして以降、一貫した課題であった。それは、青蓮院吉水蔵から阿部美香が『本尊釈問答』を発見紹介したのを契機として急速に進展し、『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』を手がかりに、既に多賀宗隼氏や三崎良周氏により紹介―公刊された貴重な聖教に加えて十五点もの慈円著作聖教を確認する事ができた。加えて、建仁三年の『夢想記』を含む灌頂の秘事口伝『毘逝別』の承元四年慈円自筆本も改めて確認された。現在、東京大学史料編纂所と龍谷大学によって吉水蔵のデジタルアーカイブ化が進行中である。

この探查から、慈円の最も豊穡な結実の時期であった承元年間、後鳥羽院の為に、独創的な密教修法『三種悉地法』の創造が、『厭離欣求百首』詠出をもたらししたこと、ひいては未完の「恋五十番自歌合仮名序」と云うべき企ての慈円歌論に至る脈絡が浮かびあがる。更に思惟を重ねて、建保六年の四天王寺に赴き太子に祈る日記でもある『五智』から、『難波百首』に始まる法楽和歌の奉納に至る道程を知り、やがて『愚管抄』撰述に及ぶ理念表明としての『道理』とは何であったかを推察する試論を提出する。それらの慈円の宗教テキストは、全てが、冥の仏神等との対話と云うべき交信、交流、交渉を果たす為の動的関係性を生み出す所産、私にいう△間宗教テキスト▽であることを、改めて確認したい。

(本講演の為に編集する慈円著作年譜を含む資料集は、会場に来場された方に配布します。)

## 鎌倉時代の藤原秀能評の変遷と背景―『後鳥羽院御口伝』から『井蛙抄』へ―

東京大学大学院生 村瀬 空

藤原秀能は、北面の武士という低い身分にありながら、後鳥羽院の庇護のもと新古今歌壇で破格の活躍をした歌人である。院の寵愛ぶりをよそに、定家が秀能を「無下の歌」と難じたという『後鳥羽院御口伝』の逸話はよく知られる。ところが後代の『井蛙抄』雑談篇では、定家は秀能について「御所に被思食たる程はなし。家隆卿申ほど、無下の歌よみにはあらず」と語ったとされ、辛辣さは弱まっている（鎌倉時代後期、二条為藤の談）。これは、定家を祖とする二条家において、秀能の評価が上昇したことを意味するのではないか。『井蛙抄』は他にも、『新古今集』での秀能の一七首入集を先規として、二条為世撰『新後撰集』では津守国助が一七首もの入集を果たしたことを記す。後鳥羽院の秀能びいきの先例は、二条家の縁戚たる津守氏優遇の口実にも使われていた。本発表では、こうした秀能の扱いの変遷とその背景を、鎌倉時代の歌壇史の特質に留意しつつ考察する。

そもそも新古今時代当時、秀能の躍進は必ずしも歓迎されていなかったと思われる（明月記等）。侍身分かつ若年の秀能の活躍は異例で、定家の非難にもそうした事情を勘案すべきだろう。ところが鎌倉時代中期になると、秀能の評価が次第に上昇する。卑官の秀能の活躍が院歌壇の公平性の証とされ（八雲一言記）、秀能の血筋が重代歌人の家として配慮されるようになる（続古今和歌集撰進覚書）。中世古今注では、秀能が武家歌人から仰がれた形跡もある（毘沙門堂本古今集注）。歌人層の拡大の中で、地下や武家歌人の優れた先人とも言える秀能を否定することは、歌道家にとっても得策でない選択となりつつあった。また、近時の和歌研究で指摘される、定家と後鳥羽院の歌観の対立を矮小化したい二条家側の動きとの関連も想定されよう。こうした様々な歌壇の事情が絡みあい、秀能の評価が高められたと考えられる。秀能評の変遷は、鎌倉時代の和歌史の一面を象徴するのである。

## 『竹園抄』の「追加」をめぐる

帝京大学 梅田 径

藤原為顕が為家からの聞書によったとされる『竹園抄』は、二条冷泉の両流に連ならない「為顕流」と呼ばれる一派の歌学書である。本書の伝本については、久曾神昇、三輪正胤らによる研究があり、鎌倉期に遡る伝本や奥書からみる流布の様相が明らかになった。とくに三輪は『歌学秘伝の研究』および『歌学秘伝史の研究』で為顕流をはじめ鎌倉時代の末流歌道家の諸相を論じており、『竹園抄』の伝受を受けた能基は古今集注にも名前がみられることから、仏教文学の側からも注目を集めている。しかし、三輪の論では為実による改編を指摘するものの、多くの伝本には為実の介在をうかがわせる記述はなく、歌道家による歌学書として都で広く長く受容されたようには思えない。伝本の様態と受容の実相については、再考の余地がないわけではない。

本発表では、『竹園抄』伝本の再検討を行い、成立ではなく受容の側から本書の位相を考察してみたい。従来付属物とされてきた末尾の「追加」に注目する。追加をもつ伝本は必ずしも多くはないが、書陵部鷹司本、国会図書館本、大阪市立大学森文庫本などは「五音次第」をもち、賀茂別雷神社本、書陵部鷹司家本一本などには、「歌道之秘事」という追加部分がある。他の伝本でも「制詞」や抜き書きが散見される。しかしこの追加については類似の章が見える場合であっても異同も著しく、随時加筆されてきたことがうかがえるのである。それは『竹園抄』が特定の流派の歌学書であるということよりも、より実践的な歌学書として扱われることを期待されていたものと思われる。「五音次第」は連歌論書『長短抄』に影響を与えたことが明確であり、為顕流の歌学書として広く受容されたとは思えない。『竹園抄』がいかなる本として構想され、どのように享受されてきたのか、室町から江戸期にかけての受容の一端を明らかにしてみたい。

## 『最須敬重絵詞』における歌学書受容

龍谷大学大学院生 東野 空

本願寺第三代覚如の行状を表した伝記には、『慕婦絵』（十巻、西本願寺蔵）と『最須敬重絵詞』（七巻、ただし諸本三・四巻を欠く、以下、『敬重絵』）がある。『慕婦絵』は覚如が観応二年（一三五二）に没した後、約九ヶ月後に成立するが、佐々木（二〇一三）は、巻五第三段目の歌会場面以降に覚如の和歌事跡が列挙され、それが高僧伝としての『慕婦絵』の特徴であることを指摘する。一方『敬重絵』は覚如没後一年の文和元年（一三五二）に覚如の門弟乗専が著したが、和歌はわずかに五首（覚如詠は『慕婦絵』と共通する四首のみ）が巻七にまとめられるのみである（佐々木、石井二〇一七）。このように『慕婦絵』に比して和歌の扱いが小さい『敬重絵』であるが、巻七第二十五段に記される歌論は従来から注目されてきた。ここでは、①狂言綺語観と和歌の歴史、②法然と和歌、③歌の体が述べられたのち、覚如が和歌を詠むことの必然性が説かれている。このうち①は歌学書に見られる常套句であるとされ、③は『沙石集』との表現の類似が指摘されてきた。しかし、③については、当時の歌学書との関係を指摘することができる。天保三年（一八三二）の序文を持つ『真宗仮名聖教関典録』では、『敬重絵』の③の語句「天然二ハ梵文ヲモテ言ヲ通シ等」について、「家隆卿ノ心所詮トイヘル短文ニ、此二類スル語アリ、和歌灌頂秘密鈔ニ出タリトイヘリ」と注するのである。そこで③を検討すると、『和歌灌頂次第秘密抄』だけでなく、『和歌知頭集』や為頭流の『和歌古今灌頂卷』等の偽書との類似性も見出だせそうである。

『敬重絵』は、南北朝期において、真宗の側が偽書とされる歌学書を撰取したことが分かる一例であり、同時代の僧侶たちの和歌との向き合い方をうかがえる貴重な資料といえる。本発表では、『敬重絵』の和歌と歌論の考察から、覚如が和歌を詠むということとどのように仏教の立場から説明しようとしたかを考えたい。

## 中世宗像の能―宗像大社文書「古能台本」をめぐる

名古屋高等学校 佐藤 和道

宗像大社に所蔵される古文書中に「古能台本」と称される史料がある。これは、八巻文書第六巻に含まれる四種の書状（文書番号一六八号―一七一号、『宗像大社文書』第一巻、宗像大社復興期成会発行、一九九二年所収）の紙背に記された一連の能の詞章と思しきものである。表面は、宗像氏及びその家臣に諸氏から宛てた書状で、年号の記載はないが、宝徳元年ごろに書かれたと推測されている。紙背もそれと大きく隔たらない時期に書かれたと思われる、福島和夫氏により、『石山寺縁起』を素材とした風流能との指摘がある（『宗像大社文書』注解）。

古来、宗像には、亀石大夫という猿楽の役者が居住し、祭礼などに勤仕していた。また、宗像神社の神事を記録した『応安神事次第』（『宗像大社文書』第三巻、二〇〇九年所収）には、八月十五日の放生会等に猿楽が行われたことが記されている。さらに、後代の史料ではあるが、天正六年の遷宮祭礼に際し、亀石大夫が（翁と〈養老〉以下十番の能を演じた記録も見える（『宗像第一宮置札』『宗像大社文書』第四巻、二〇一五年所収）。これらの点を考えれば、「古能台本」も亀石大夫によって演じられた能であった可能性がある。

本曲は、『石山寺縁起』などに見える東大寺・石山寺創建説話に基づくものであるが、番外曲を含む現存する能の中に該当する作品を見出すことはできない。一方で、構成は、世阿弥が確立した能の形式と相違する部分が多く、大成以前の能の姿をうかがう手がかりとなる可能性がある。本発表では、史料の歴史的な位置づけや典拠となった説話撰取の様相について考察を行い、室町中期以降の西国における能楽享受の一端を明らかにしたい。



## 撰集における「堀河院御時」の受容―金葉・千載・新勅撰―

相愛大学名誉教授 鈴木 徳男

「末代の賢王」（続古事談）と称される堀河天皇（没後すぐの追号により「堀河院」）は「絃管歌詠之遊」に通じ（中右記）、その時代は、音楽・和歌の両面で文化的に高く評価されている。嘉承二年（一一〇七）七月一九日、二九歳にて崩御、在位二年であった。ほぼ二〇年後、白河院は後拾遺集に続き治世中二度目の勅撰集（金葉集）撰進の命を下した。撰者源俊頼は、堀河院御時百首（以下、堀河百首）から四四首（二度本）を採用している。巻頭の詞書に「堀河院の御時百首歌めしけるに立春の心をよみ侍りける」とあり応制の形式を明確にする。さらに堀河院御時を重視して当代の詠六八首を入集させ、この時代を和歌の盛時と位置づけた（柏木由夫）。俊頼の閲歴に照らしても順当な撰歌であったと考えられる。金葉集の和歌史観は俊成に引き継がれ、千載集では仮名序に「白河の御世には後拾遺を勅せしめ、堀河の先帝はもちの歌をたてまつらしめたまへり」などとあるように、百首は勅撰集同等に扱われている。千載集は堀河百首から七七首を採っており、うち一七首が俊頼詠であるのは百首に限らず全体にみられる俊頼称揚の意図も働く。ただし『古来風体抄』は金葉集を「少し時の花をかざす心の進みにけるにや、当時の人のみ初めより続き立ちたるやうにて、少しいかにぞ見え侍るなるべし」と評する。こうした和歌史観に基づき、堀河院御時を撰集に取りこむ方法は、詞花集や続詞花集などの六条藤家の撰集には見られない傾向である。とりわけ成立が近接し、選歌範囲など規模が類似する続詞花集と比べ、千載集の特色を如実に示している。御子左家の伝統として、堀河院御時を尊重する態度は、定家の新勅撰集にも形をかえて認められる。「堀河院御時」の受容は、撰集資料の扱いの違いにとどまらず、和歌史観として、撰集の上に顕現していると考えられる。